



伝統的な職業

ルスタンベコワ・アフエト
哲学史博士
グセイノフ・ルスラン

アゼルバイジャンの ケラガイの様々な種類



ケ ラガイは、アゼルバイジャン人の民族的アイデンティティの認識可能な要素です。

各民族グループの伝統的な服装には、国外でその国民的アイデンティティを強調することに加えて、社会的地位の一般に受け入れられている指標に加えて、婚姻状況を示す慣習が存在する、別個の社会の識別子もありました。地域とその人の年齢。同時に、特別な美学、儀式的機能、神聖な重要性が、民族衣装の有機的な要素である頭飾りに割り当てられました。

前世紀までのアゼルバイジャン女性の頭飾りの多様性は、まず第一に、イスラム以前の文化的小および宗教的ルーツが深い女性の義務的な頭飾りと関連付けられていたことに注意する必要があります。アゼルバイジャン人女性のヘッドカバーは、衣装を補完し、有利に強調しており、特別な情報コンテンツも備えています。したがって、女性の社会的地位、場合によっては階級層が変化するにつれて、結婚とともに頭飾りに特別な変化が起きました。

アゼルバイジャン女性のさまざまなカラフルなヘッドカバーの中でも、エレガントなシルクのヘッドカバー「ケラガイ」は、その民主主義によって際立っていたが、その構成的なデザイン、つまり色やパターンは、地域、婚姻状況、年齢に関する特定の情報を伝える媒体でありました。

ケラガイの撚りのない絹糸から作られたエレガントなヘッドカバーは、コールドヒールとホットヒールプリントを使用して、一枚一枚手作業で装飾されました。古代のシンプルなデザイン技術を保存したこの印刷物は、装飾的

および構成的構造の解釈の特徴を際立たせており、アゼルバイジャンの印刷布メーカーの豊かな創造的想像力と高い技術を証明しています。

ケラガイの品種を決定するための最も信頼できる情報源は、装飾的な組成構造と色のバリエーションで表される 19 世紀から 20 世紀の工芸品です。構成構造の観点から、ケラ



ガイは装飾品の数と配置に応じて条件付きでタイプに分類できます。

ボーダー - 最も単純化されたバージョンは、単色の中間フィールドと、縁に沿った 1 つの細かいパターンのストライプの形の構成です。境界線の色の数は通常、対照的な 3 色を超えません。このタイプのケラガイの装飾的かつ構成的な解決策は、花やアーモンド形の「ブタ」飾り、時には鳥、そして 1 本の細かい装飾用の境界線の形で、中央のフィールドに沿って散在する均一なパターンで構成されています。このオプションでは、無地のミドルフィ



ールドの隅に「シャフ」と呼ばれるパターンを配置することができます(1)。

複雑な装飾 - この構成は、製品の表面全体をさまざまなパターンで連続的に充填するバリエーションで構成されています。

ケラガイのすべての品種の装飾構造は、正方形の対称性に基づいた古典的なスキームに従って実行される、閉じた構成の原則に基づいて構築されています。そして、色彩主義的な構造では、3色または4色の装飾品のコントラストの原理が観察されました。

ケラガイの名前は、その色や装飾に由来しており、それらにも特定の意味があることにも注意してください。

ANAS アゼルバイジャン国立歴史博物館の民族誌コレクションと、ルスラン・フセイノフによるアゼルバイジャン民族衣装の個人コレクションから、現存するケラガイの例をいくつか見てみましょう。

ケラガイの2種類の名前は、ケラガイの色であるタマネギの皮の色である「ソガニ」と、

濃い青色である「スルマイ」に由来しています。このタイプのケラガイは、単色の中間フィールドと模様のある、多くの場合2色の境界線という最も単純な形をしていました。

「サチャグリ」のケラガイ(フリンジ付き)は珍しい種類のシルクのヘッドカバーで、アゼルバイジャンのグバ地方で作られたため、地域指定がされています。

「ソナヌ・ウルドゥズ」のケラガイ(消えゆく星)は、ミドルフィールドのダークチェリーの背景に小さな赤い星が散在し、1つのパターンの境界線で囲まれた構成からその名前が付けられました。情報提供者によると、このタイプのかぶり物は若い未亡人が着用していたといわれていました。

「アイリ・ゲジャ」のケラガイ(月明かりの夜)という名前も、濃い青色の背景に白い三日月と輝く単一の白い縁取りで構成される装飾的な内容に由来して付けられています。年配の女性が着ていました。



その構成デザインに基づいて、均一な小さな円と単一系列の光の境界線で構成されるケラガイ「ノクスドゥ」(エンドウ豆)とも名付けられました。装飾や色も年配の女性向けにデザインされている可能性が高くなります。

「ナズ」と呼ばれるケラガイは、250x120 cm の独特の長方形の形状とひし形の連なりの構成構造を持ち、グバ「シャーンツァルリ」、シルヴァン「オン・ルシマン」、ガラバフ「アチュマ・ユンマ」の絨毯装飾に見られます。

装飾的な構成構造のすべての種類の中で、最も複雑なのは「ヘラティ」構成です。中央のフィールドの中央には、「マジュマイ・ギュル」(皿形の花)と呼ばれる、植物の模様が織り交ぜられた丸いメダリオンがあります。メダリオンの端は通常、太陽の光を象徴するジグザグの線または歯で囲まれています。直径 25 ~ 30 cm の中央のメダルの周りには、炎の舌を擬人化したギザギザのアーモンド形の大きな「ブタ」の装飾品があり、生命の樹「ヘヤト

ウ・アガジ」のイメージが引き立てられています。中心円の次の列は花柄で満たされており、隅には鳥が配置されています。正方形の中央フィールドは、中央のメダリオン「ラチャク」の四分の一によって完成します。この構成の解決策は、アゼルバイジャンのカーペットの構成「ギミル」と「ラチャクトゥルンジュ」に見られます。ボーダーは複雑な花柄を組み合わせた多段ストライプで構成されています。

研究されたカラガイ「ヘラトゥ」のすべての品種は同一の組成構造を持っていますが、個々の要素とパターンの密度が異なります。この構成では図面のスケールを拡大し、暗い背景に白と黄土色または赤の2色または3色を使用することで、装飾的なサウンドが強調されます。さまざまなバリエーションと構成構造で、さまざまな装飾的なソリューションを形成します。

「ヘラトゥ」という構成との類似点は、ケラガイ「ギュルボンディ」(花柄編み物)の装飾に



見られます。中央の丸いメダリオンと2本の模様
のボーダーストライプで構成され、その間
の空きスペースはアーモンド形の「ブタ」装飾
品で埋められています。 。カラースキームは、
暗い背景に赤い装飾の形で表示されます。「
ヘラティ」と「ギェルベンヂディ」のケラガイは、
お祭り気分や若者向けの被り物を表していま
す。

特に興味深いのはケラガイです。その構成
は散在する植物モチーフで構成されており、
その中にはカルトゥーシュにコーランのスー
ラが含まれています。ご存知のとおり、イスラ
ム教は新しい価値観を導入し、イスラム世界
全体でアラビア語が神聖なものとして確立さ
れ、そのためグラフィックには魔法の力が与え
られていると考えられました。碑文はオブジェ

クトに神聖な意味を与えました。このヘッドカ
バーはお守りとして使用され、特別な機会に
着用された可能性があります。

19世紀から20世紀初頭の入手可能なケ
ラガイを考慮すると、その組成構造の多様性
に注目する必要があります。しかし、より豊か
な模様のデザインが存在することは、博物館
の印刷された切手のコレクション (120 以上
の保管ユニット) によって証明されています。

アゼルバイジャンでは、女性の頭からつま
先まで全身を覆う大きなベッドカバー「チャ
ルシャブ」、「チャドラ」が、大都市や貿易が発達
した郊外の村で広く普及していたことに注意
してください。アゼルバイジャンの一部、特に
国の西部と南部の地域では、このタイプのか
ぶり物を知りませんでした。(2)



ケラガイはさまざまな方法で結び付けられており、最も一般的なものの例が図で示されています。

最も一般的な形式は、スカーフで頭を覆い、一方の端を右肩越しに背中後ろに投げるといったものでした。また、スカーフの両端を背中に垂らすように頭を覆い、リボンで折ったもう一つの小さなスカーフで額から後頭部まで結び、ターバンを作るといったバリエーションもありました(3)。

したがって、アゼルバイジャンの頭カバーの包括的な研究により、その組成構造の多様性が明らかになりました。シルクの装飾用ヘッドカバーの製作と装飾の技術における長い発展の過程を経て、独特の芸術的かつ比喩的な言語が達成されました。ケラガイのパターンは描かれるモチーフの種類が異なり、最も単純なものから最も複雑なものまでさまざ

まな程度の複雑さを持っています。研究されたケラガイの30以上のサンプルでは、単純な構造(境界線と複雑な装飾構造)「ヘラティ」が数値的に優勢でした。さまざまなケラガイのデザインの中で、特にボーダーがくっきりと目立ちました。

花や太陽のモチーフがパターンに多く見られますが、鳥類や幾何学模様はあまり一般的

ではありません。ケラガイ パターンの情報コンポーネントの1つは、画像の意味論的な内容にあります。ケラガイ族の芸術言語の独創性と表現力は、彼らをアゼルバイジャンの人々の芸術文化、工芸、生活、世界観の様式的特徴の指揮者にしています。★

文学

1. Pashayeva V. アゼルバイジャンのカラガイの構成の特徴 // 記述的および装飾的に応用された芸術の問題、No. 1、バクー、2009年、p.38。
2. アレクペロフA.K. アゼルバイジャンの考古学と民族誌の研究。バクー、1960年、p. 121。
3. カラカシュリー K.T. アゼルバイジャンの頭飾りについて。アゼルバイジャンの歴史に関する資料。バクー、1973、87。